

八尾市文化財調査報告13

東郷遺跡第21次埋蔵文化財発掘調査概要

1986年10月

八尾市教育委員会文化財室

東邦遺跡第21次埋蔵文化財発掘調査概要正誤表

	誤	正
目次 1 9	接図目次 1 12 S D 1・N R 1 断面実測図 1 14 出土遺物実測図 1 15 調査地周辺図	接図目次 S D 1・N R 1 断面実測図 出土遺物実測図 東邦遺跡遺構配置図
P 2 1 19	瓦器挽 1 28 周溝	瓦器挽 周溝
P 7 1 19	生駒西麓産 古代土師器 1 24 細頸	生駒西麓産 古式土師器 細頸

P 9 出土遺物観察表 T G - 21 色調胎土の正誤

遺物番号	誤	正
6	雷母	雲母
12	キャート	チャート
13	零母	雲母

例　　言

- 1、本書は、八尾市光町1丁目43・44所在東郷遺跡の遺構確認調査報告書である。
 - 2、発掘調査は八尾市教育委員会文化財室が主体となって実施した。
 - 3、発掘調査及び報告書作成に要する経費は、全て土地所有者である　氏に負担いた
だいた。
 - 4、発掘調査の実施にあたっては、八尾市文化財専門委員谷野浩氏の指導を受けるとともに、
大阪府教育委員会技師福田英人氏の御協力を得て下記の調査体制を組むこととした。
- 調査担当者　米田敏幸
- 調査員　藤田義成　杉本尚子
- 調査補助員　富田芳久　林賢吾　八元聰志　中野竜介
- 5、本書の作成は米田、杉本が分担して行ない、執筆は本文を米田、観察表は杉本が担当し
た。
 - 6、調査の実務にあたっては　氏の多大なご尽力を得た。記して感謝したい。

本 文 目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調査の概要	2
調査地の層位	2
遺構の概略	2
第3章 出土遺物	7
出土遺物観察表	9
第4章 まとめ	10

搜 図 目 次

第1図 調査地位置図	1
第2図 遺構断面図	(折込) 3~4
第3図 S D I・N R I 断面実側図	5
第4図 遺構平面図	6
第5図 出土遺物実側図	8
第6図 調査地周辺図	10

図 版 目 次

図版1 調査地北区全景・調査地南区全景	
図版2 方形周溝墓南側・N R I 遺物出土状況	
図版3 出土遺物	

東郷遺跡第21次埋蔵文化財発掘調査概要

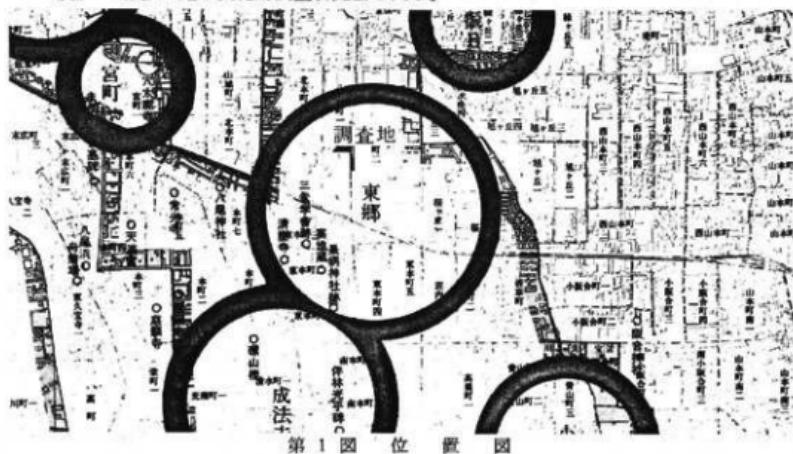
第1章 調査に至る経過

東郷遺跡は、八尾市光町、北本町、桜ヶ丘一帯に位置する集落遺跡で、昭和56年から現在に至るまでの間に20次の発掘調査が実施されている。今回発掘調査を実施することとなった光町⁽¹⁾1丁目43・44番地は、これら一連の発掘調査地の中では最北端に位置し、古墳時代の集落推定範囲の中でも北縁部にあたっている。今回の調査地の南に隣接する土地においても、昭和58年度に17次調査が実施されており、古墳時代の方形周溝墓及び壇棺墓群が検出されている。⁽²⁾

今回、当該地において病院を目的としたビルを建設する旨の届け出が浅井禮子氏より提出され、当教育委員会文化財室との協議の結果、昭和61年11月6日より約1ヶ月の期限を決めて発掘調査を実施することとなった。調査は建物建築予定範囲のうち、調査可能な部分を対象として実施した。方法としては、想定される遺構存在部分及び遺物包含層の上面まで機械掘削を実施し、以下は手振りによる精査を行なった。現地における調査は昭和61年10月28日に終了し、以後昭和61年11月15日までに出土遺物及び調査記録の整理を終了した。

註

- 1、高萩千秋「東郷遺跡」『八尾市埋蔵文化財調査概報1980、1981』八尾市教委1983他
- 2、駒沢 敦「東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要、昭和59年度』(財)八尾市文化財調査研究会1985。



第1図 位 置 図

第2章 調査の概要

〔調査地の層位〕

当調査地では、調査時において、平均1.1mの盛土がなされており、第2層の旧耕土層は、TP + 6.7m以下に約10cmの厚みで存在する。しかし調査地東側の端においては、旧耕土層が約50cm上がっており、調査地と調査地の東側で大きな段差が存在したことが判明した。この為、当調査地においては、水田の造成によって、幾分かの削平がなされており、中世～平安時代の包含層が東側の断面において観察できた。この削平土は、旧耕土直下の第3層暗緑灰色粘質土で、中近世の土器、陶磁器の細片が含まれている。この下の灰色粘土層（第5層）が古墳時代から奈良時代の包含層で、土瓶器、須恵器片が含まれている。調査地の西北には第3層と第5層の間に第4層暗黄灰色粘質土層が挟まっており、平安～中世の層の残存と考えられる。古墳時代の遺構は、第6層～第8層までの黄灰色の粘土～シルト及び暗褐色の砂質土に掘り込まれている。この面の標高は、TP + 6.1～6.4で、調査地の北東側が高くなっている。第8層より下は淡灰色の砂の堆積で、それ以下は確認できなかった。古墳時代の遺構の削平時期は第5層より奈良時代の土器(9)が完形品で検出されている為、この時期前後であろうと推定できる。

〔遺構の概略〕

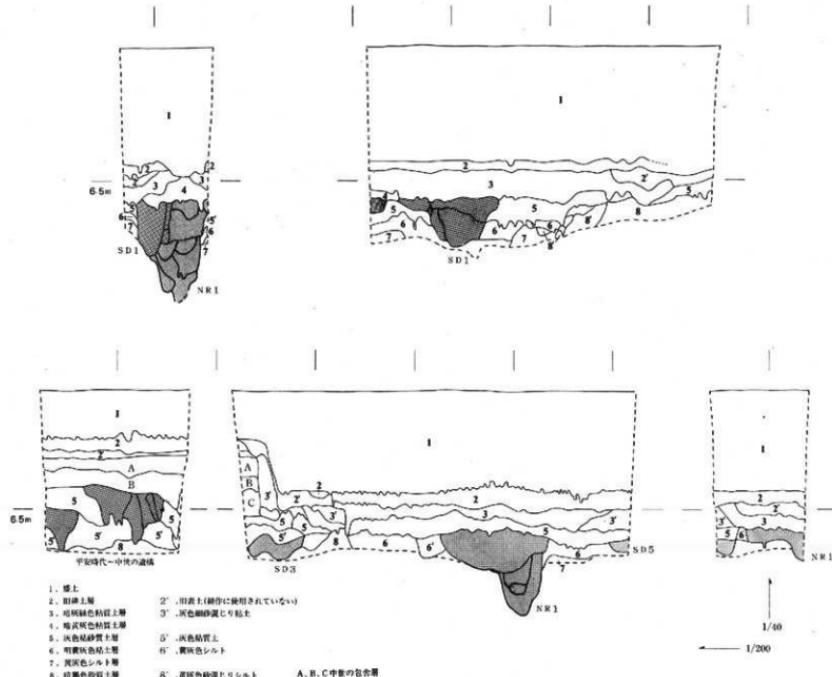
調査地で検出した遺構は平安時代及び古墳時代初頭の遺構が主で、遺物を含まず時期不明のものもある。

平安時代の溝S D - 1 調査地の西北で検出した幅1.3m深さ0.5mの溝で南西から北東方向にのびている。この溝の上層では、平安時代末と推定される互器碗が2個体出土している。

古墳時代の溝S D 3 調査地の東側で南北方向に検出した溝で、幅3m深さ0.4mを測る。調査区の中央東側で途切れており、調査地の東側にまわり込むものと考えられる。この溝からは土錘(7)や弥生時代末～古墳時代初頭の土器(1・4)が検出されている。溝の埋土は灰色～暗灰色の粘質土が堆積している。この溝は17次調査で検出された溝S D 3の延長上にあるものと思われる。

方形周溝墓S X 1 調査地の中央で検出したもので、周溝の底部分のみが残存していた。検出規模は、1辺約6mで、北東側の辺の周溝が途切れており、ここに陸橋部が存在した可能性を示唆している。主軸は北に対して30～40°西に振っており、東都遺跡の他地区で検出された古墳時代の遺構の主軸方向によく類似する。同溝の検出幅は0.6m～1.3mで深さもよく残存する部分で0.2m程度である。堆積土は灰色砂質土～暗黄灰色粘質土で、古式土師器片が若干出土している。

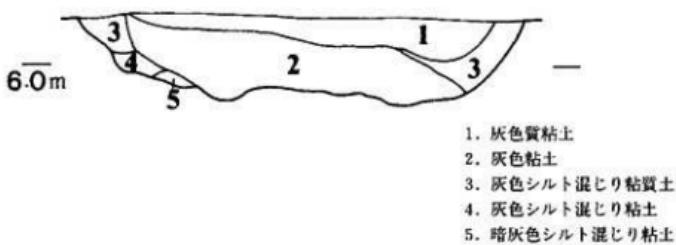
古墳時代以前の水路N R 1 調査地の西側を南東から北西方向にのびる水路である。水路



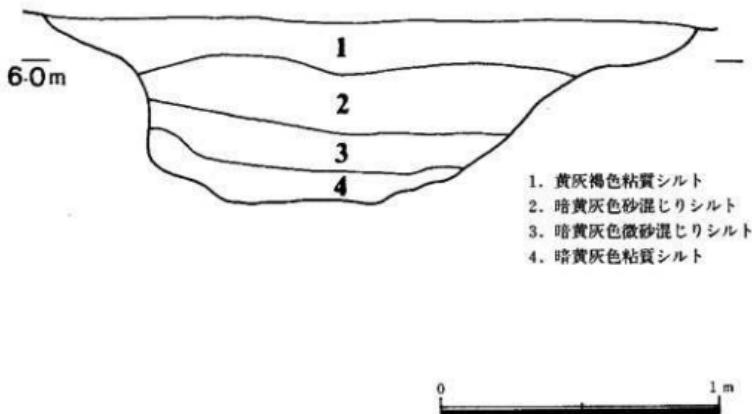
第2図 調査地断面図

の幅は2.2m～2.6mで、深さは調査地の南側で60cm、北側で90cm以上を測る。溝内にはシルト、粘土、砂が交互に堆積し、一時水が流れている状況をよく示している。溝の埋土最上層からは、弥生時代末～古墳時代初頭の土器（12、13）が検出されている。出土状況は水路の方向に沿って並べられたものであるが、この水路に伴なうものとするよりは、方形周溝墓S X 1の供獻土器と考えるのが最も妥当であろう。なおこの水路と同じ規模、同一方向の溝が、11次調査区においても検出されており、両者の関連性が今後の課題となるであろう。水路の中、下層からの出土遺物は全く検出できなかった。

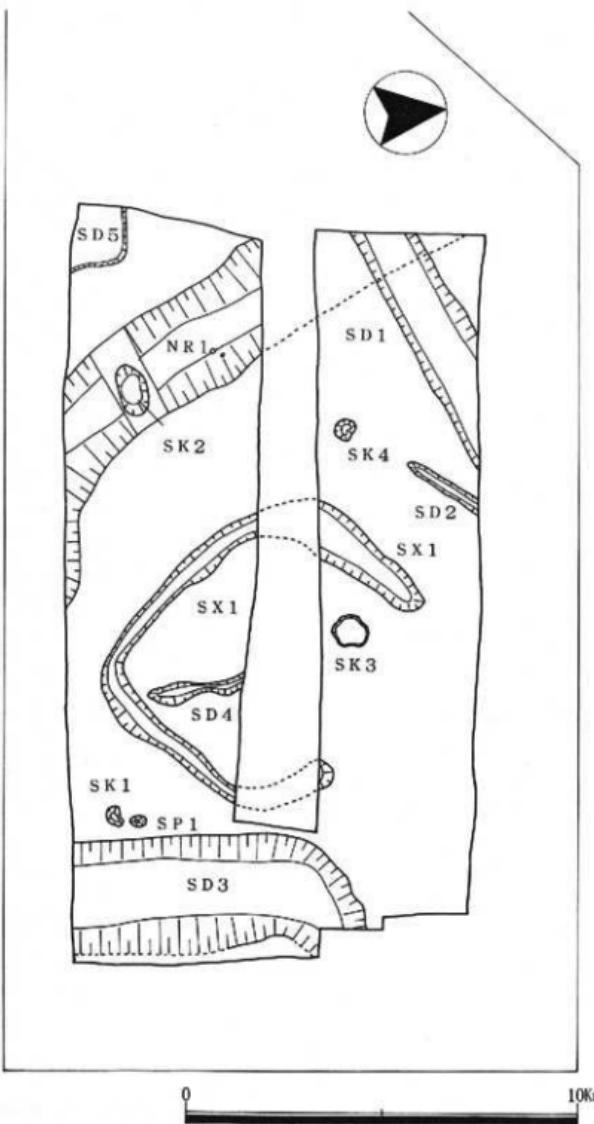
S D 1 断面実測図



N R 1 断面実測図



第3図 SD 1・NR 1断面実測図



第4図 遺構平面図

時期不明の遺構

時期不明の遺構としては、古墳時代の遺構と同一面で検出した土坑SK1、SK2、SK3、SK4、溝SD2、SD4、SD5、小穴SP1がある。いずれからも遺物の出土はほとんど認められなかつたが、古墳時代～中世の遺構であろうと推定される。

土坑：SK1は、幅0.4m、長さ0.5m、深さ25cmで不定形を呈する。SK2は長さ1.3m幅0.8m、深さ45cmで長円形を呈し、NR1の埋土上面より掘り込まれている。暗灰色の粘質土を堆積土とする。SK3は方形周溝墓SX1の中央部に掘り込まれた遺構で、径0.9m深さ20cmの円形を呈し、粘土とシルトのブロックを堆積土とする。SK4は、径0.5m深さ15cmを測り円形を呈する。

溝：SD2は調査区北側で検出した北北東から南々西へのびる小溝で幅0.3m、深さ10cmを有する。SD4は、調査区南側で、SX1の中央付近を南北にのびる不整形な溝である。

幅0.3～0.4m、深さ20cmを測る。SD5は、調査区の南西隅で検出したが、ほとんどが調査区外のため形状不明である。

小穴：SP1はSK1の横で検出した径0.4m、深さ0.8cmを測るピットである。

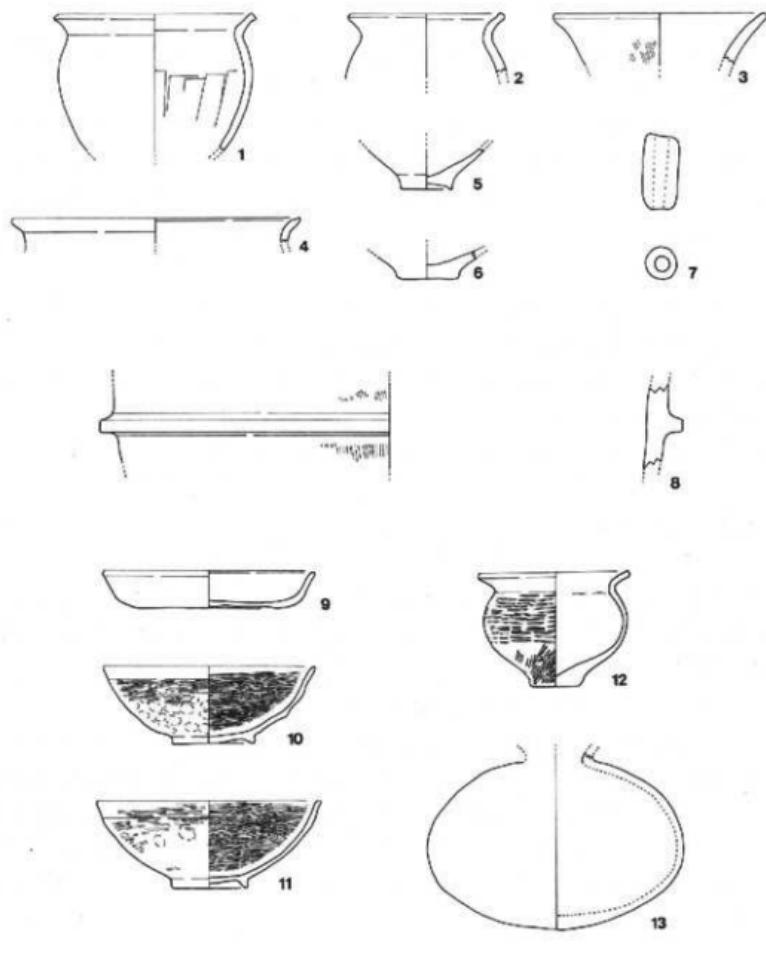
第3章 出土遺物

出土遺物としてはSD3より出土した土器(1)、土錘(7)、包含層より出土した埴輪片(8)、土師器壺(9)、NR1上層より出土した土器2点(12、13)、SD1より出土した瓦器(10、11)などが主なものである。

(1)は、甕で生駒西甕産の胎土を持つ。古代土師器に属するであろう。(7)は管状土錘で、表部は磨耗している。(8)は、円筒埴輪でも古相を呈するもので、突出したタガや縦ハケ調整から川西編年のⅠ期～Ⅱ期に属するものであろう。(9)は、奈良時代前期に属する壺である。(10、11)は2点とも挾山編年のⅣ期に比定され、平安時代末に属するものと考えられる。(12、13)は、弥生時代末～古墳時代初頭の庄内式に属するもので、(13)は口縁部を欠くが細頸の直口壺と考えられる。(12)はミニチュアの甕で祭祀用に用いられたものであることを傍証している。

註

1. 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌64-2号』日本考古学協会1978
2. 尾上実『挾山・蛭里遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会1978



第5図 出土遺物実測図

0 10Km

遺物番号 (図版)	直 摺 名	品 種	法量(現存率) 単位(cm)	成 形・調 整	色 調・胎 土	焼成・備考
1 (1)	S D - 3	甕	推定口径 13.8(4/5)	外面 磨耗のため調整不明。 内面 口縁部～体部上半はナデ体部 下半はヘラナデ。	暗灰褐色。 角閃石・雲母・長石を多 量に含む。 赤褐色。	焼成良好。
2	A区包含層	甕	推定口径 10.8(1/8)	外面 磨耗のため調整不明。 内面 山縫部はヨコナデ。体部は磨 耗のため調整不明。	赤褐色。 石英・長石を多量に含み 雲母を少量含む。	焼成良好。
3	E区包含層	甕	推定口径 14.8(1/8)	外面 ハケナデのちヨコナデ。 内面 ヨコナデ。	暗灰褐色。 角閃石・雲母・長石を多 量に含む。	焼成良好。
4	S D - 3	甕	推定口径 20.0(1/8)	外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。	灰褐色。 長石・雲母・赤褐色酸化 鉄を多量に含み、石英を 少量含む。	焼成良好。
5	E区包含層	甕	推定底径 3.6(1/3)	外面 磨耗のため調整不直。 内面 磨耗のため調整不明。	淡褐色。 長石・石英・チャートを 少量含み。雲母を微量含 む。	焼成良好。
6	E区包含層	甕	底径 4.0(完存)	外面 磨耗のため調整不明。 内面 磨耗のため調整不明。	黄褐色。 角閃石・雲母・長石を多 量に含み、石英を含み含 む。	焼成良好。
7 (2)	S D - 3	上 縫	長さ 5.4(完存) 幅 2.3		乳灰褐色。 長石・雲母・チャートを 少量含む。	焼成良好。
8 (3)	G区包含層	円筒埴輪	胴径 39.2(破片) 突堤部高 1.1 突堤幅 1.0	外面 胴部はハケナデ。磨耗著しい。 突堤部はヨコナデ。 内面 磨耗のため調整不明。	淡灰茶色。 長石・雲母・赤褐色酸化 鉄を多量に含む。	焼成良好。
9 (4)	C区包含層	上綫里	推定口径 13.0(1/2) 器高 2.7	外面 口縁部～たらあがりはヨコナ デ。底部は指押さえ、ナデ。 内面 口縁部～たらあがりはヨコナ デ。底部は指ナデ。	灰白色。 雲母・石英を多量に含み 長石・チャートを少量含 む。	焼成良好。
10 (5)	S D - 1	瓦器輪	口徑 15.0(完存) 器高 5.5 高台径 5.6	外面 山縫部はヨコナデ。体部上半 はヘラミガキ。底部下半は指 押さえ。高台底部はナデ。 内面 口縫部～体部はヘラミガキ。 底部は格子状の輪文を施す。	灰色。 緻密。	焼成良好。
11 (5)	S D - 1	瓦器輪	推定口径 15.5(1/5) 器高 6.3 高台径 5.2	外面 口縫部はヨコナデ。体部上半 はヘラミガキ。底部下半は指 押さえ。	外面 暗褐色 内面 灰色。 緻密。	焼成良好。
12 (6)	N R - 1 直上	小型 平底壺	口径 10.7(1/2) 器高 8.3 最大径 10.4 底径 3.4	外面 口縫部はヨコナデ。体部はタ キ(3束/1cm)。底部はナデ 内面 口縫部～体部はヨコナデ。底 部はヘラナデ。	外面 黒色～茶褐色。 内面 黑色～灰褐色。 雲母・石英・長石を多量 に含み、赤褐色酸化鉄・ チャートを少量含む。	焼成良好。 外表面部一 部に黒斑 あり。
13 (7)	N R - 1 直上	甕	最大径 18.4(完存)	外面 磨耗のため調整不明。 内面 磨耗のため調整不明。	外面 黑色～淡灰褐色。 内面 淡灰褐色。 長石・石英・雲母を多量 に含む。	焼成良好 外表面部に 黒斑あり。

第4章　まとめ

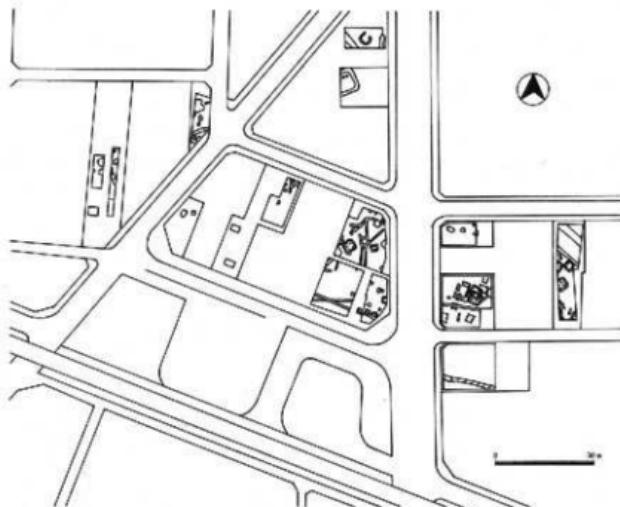
今回の調査地は、東郷遺跡の最北部に位置するうえに、遺構面の削平が甚だしく、遺物の包含状況は希薄であった。しかし検出した遺構は、古墳時代と平安時代に属するもので、東郷遺跡の集落構造を解明するうえで貴重な資料を得ることができた。

特に古墳時代の方形周溝墓の存在は、17次調査で検出した方形周溝墓、壺棺墓群の存在とともに、東郷遺跡の北側が同遺跡の墓域となっていることを確定的にした。一方20次調査においては、^(註)集落東南部における墓域の存在が明らかになっており、両者の対比は、きわめて興味深いといえる。時期的には明確なことはいえないが、今回NR1上面で出土した土器が方形周溝墓に伴うものとすれば、東南部で検出されている方形周溝墓群より古く、17次調査分と合わせて庄内式古相の時期の東郷遺跡の墓域の存在が今回の調査地周辺で示唆できるのである。

さらに南東から北西方向の水路(NR-1)の存在は、東郷遺跡の形成にあたって、この水路の方向が東郷遺跡の遺構の方位決定にあたって何らかの役割を果たしていたことが想定され、今後の調査に期すところが多い。

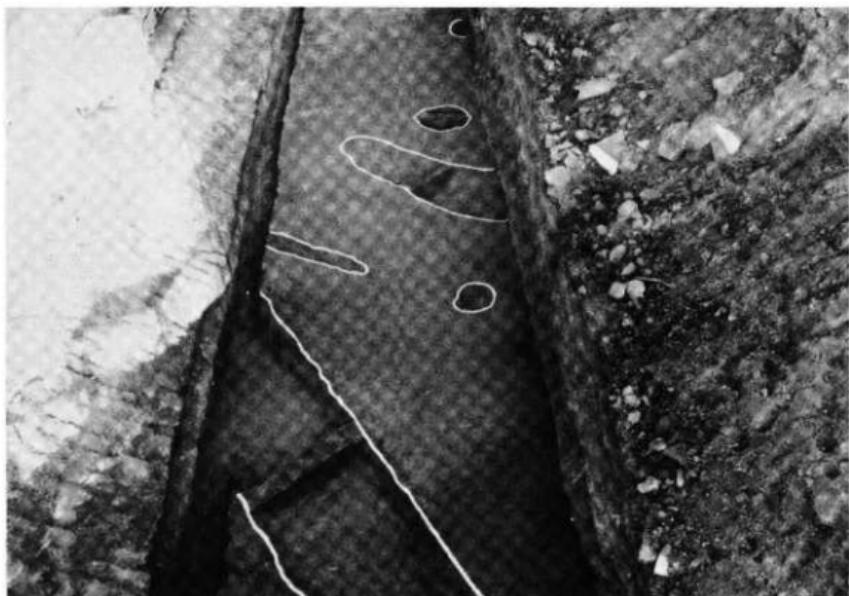
平安時代の溝(SD1)は、17次調査で検出された建物遺構との関連性が考えられる。

註 八尾市文化財調査研究会『東郷遺跡20次発掘調査現地説明会資料』1985

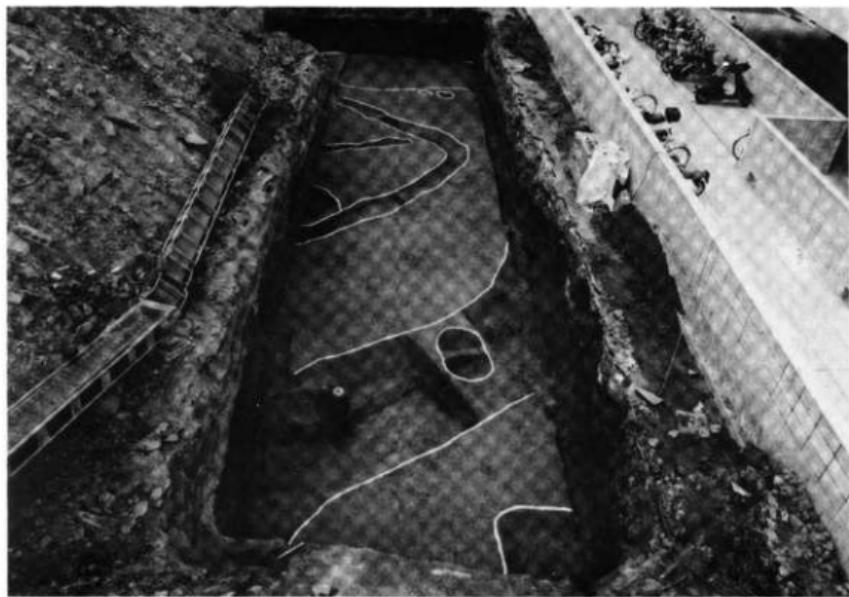


第6図 東郷遺跡遺構配置図

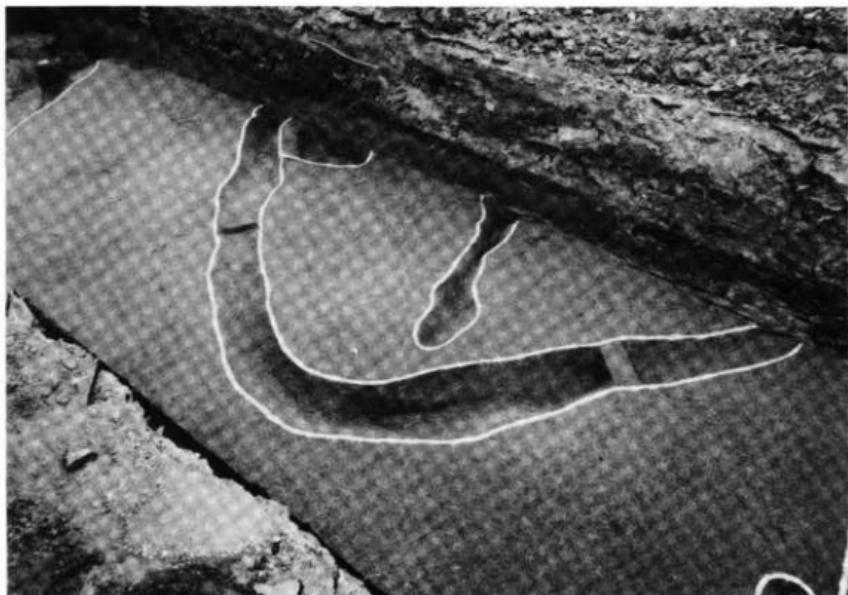
図 版



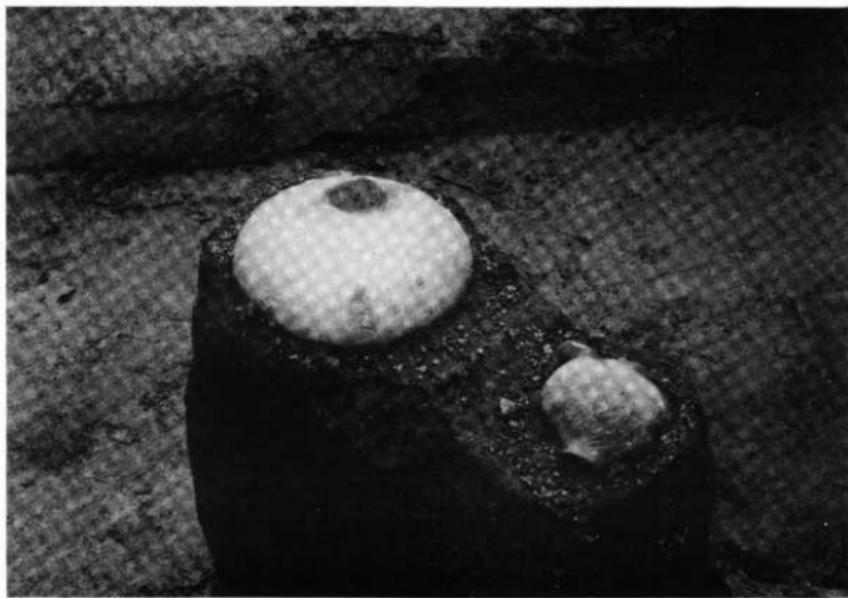
調査地北区全景



調査地南区全景



方形周溝墓南側



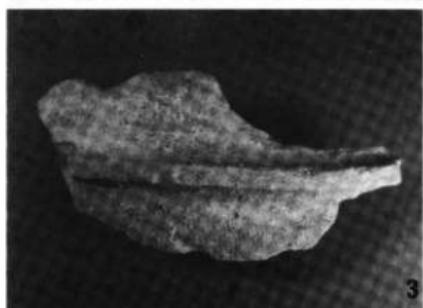
N R I 遺物出土状況



1



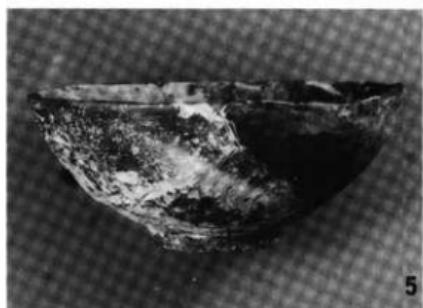
2



3



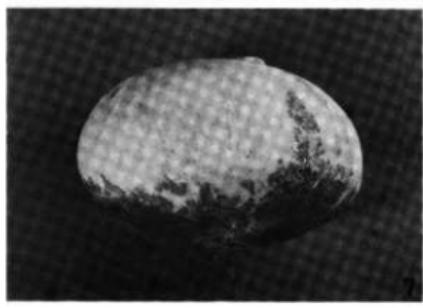
4



5



6



7



8

出土遺物

八尾市文化財調査報告 13

東郷遺跡第21次埋蔵文化財発掘調査概要

発行日 1986年10月

編集・発行 八尾市教育委員会文化財室

印刷所 摂河泉文庫

貝塚市北町20-18

TEL 0724(32)0580

